The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	芥川龍之介「南京の基督」における近代化の表象
Author(s)	李, 慕遥
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2022, 6, p. 55-58
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89324
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

芥川龍之介「南京の基督」における近代化の表象

日本学専攻日本文学　研究生
李　慕遥

０、はじめに

「南京の基督」は、一九二〇（大正九）年七月一日発行の『中央公論』に掲載され、のち『夜来の花』、『沙羅の花』、『芥川龍之介集』に収められた。また、文末の付記には、中国南京という物語の舞台設定は谷崎潤一郎の「秦淮の夜」（一九一九年）に依拠していることが示されている。

本発表では、「南京の基督」をポストコロニアリズムとジェンダーの問題系の中で精読する。登場人物の運命とそれぞれに表象されている文化の様態を明らかにしつつ、ジェンダーによって構築された権力の逆転の構造の論証を試みる。更に、その逆転を成立させる原因から、アジア独自の「近代化」の可能性を探ってみたい。

１、ジェンダー秩序の転覆を孕む「南京の基督」

「南京の基督」のテクストは全て「タ形」で終わっている。一見して安定している語りの時間は、「ある秋」から「今年の春」へ、また「今夜も」という変化をしている。小谷瑛輔[1]の分析によると、テクストの語り手は外部から金花を描いているが、時々金花自身の視点もあるため、第一章、第二章は実際に起こった出来事そのままではなく、金花によって語られ、日本の旅行家によって想像された出来事として語られたという。つまり、「南京の基督」は「覚束ない支那語」で金花の話を聞いた日本の旅行家の認識に基づき、日本の旅行家に想像し得る範囲のことが語られテクストは構成されている。そうであるならば、金花は自分の事跡を旅行家に話し、旅行家はそれを信じて受け取ることしかできないため、彼女は語りの主導権を持っている。このように、「南京の基督」の金花の声は完全に封殺されていないため、語りのレベルにおいて金花と日本の旅行家との逆転がありうるのである。その上で、金花と混血児の行く末を比較した時、知識を持たない下層階級に属する娼婦は快復でき、知識のある上層階級の女郎買いが発狂にまで至ったことは、秩序の反転による階級構造の崩壊を表しているであろう。

一方、金花は再生産から基本的に外れたところにある娼婦であり、人口の増殖に貢献できない立場にいる。金花がどのような立場にいるかを検証する上で、フーコーが唱えた「生権力」を補助線にしたい。フーコーの生権力は個々の人間の生そのものへ介入し、人間の身体をソフトに管理（規律訓練）し続ける近代的な権力であり、生の有用性を増

[1]小谷瑛輔「寄生する語りの欲望　芥川龍之介「南京の基督」Ⅲ」松本和也編『テクスト分析入門：小説を分析的に読むための実践ガイド』（ひつじ書房、二〇一六）、一〇〇－一一三頁

大させることを目指す生産的な権力である。したがって、再生産をしてはならない性を持つ娼婦である金花は社会制度の構築物になれず、近代国家の秩序を守るために設けられた「姚家巷の警察署の御役人」に差別されたのである。しかし金花も陳三茶の姉も、同じく自分の体しか持っていない娼婦だが、知識階級の男を発狂させた。そして労働能力のない父を養うために娼婦になった金花は、男性中心主義の封建的家父長制を転覆させ、家庭内においては父の命を操ることのできる〈権力者〉である。つまり、フーコの理論に踏まえて見ると、非生産的、且つ近代的社会制度から疎外された性は、ジェンダー秩序を逆転する手立ての一つである。

２、ジェンダーによる秩序の転覆が成立しうる要因

金花がジェンダー秩序を逆転する力を持つ原因は、二つある。まずはテクストにおける金花の歯についての描写に注目したい。

> 金花は彼の腕に、鴉髻の頭を凭せながら、何時もの通り晴れ晴れと、糸切歯の見える笑を洩らした。（中略）しかし血色の悪い頬には、昨夜の汗にくつついたのか、べつたり油じみた髪が乱れて、心もち明いた唇の隙にも、糯米のやうに細い歯が、かすかに白々と覗いてゐた。

糸切歯は犬歯である。字面通りの意味では、糸切歯は鋭いイメージを持ち、「武器」として使えるため、野蛮性をも意味している。金花は、この「糯米のやうに細」くて鋭い歯で、天国の夢の中で次々と運ばれてきた肉料理を食べていた。

> 燕の巣、鮫の鰭、蒸した卵、燻した鯉、豚の丸煮、海参の羹、――料理はいくら数へても、到底数へ尽されなかつた。（中略）と思ふと又箸をつけない内に、丸焼きの雉なぞが羽搏きをして紹興酒の瓶を倒しながら、部屋の天井へばたばたと、舞ひ上つてしまふ事もあつた。

動物の肉を食べて、その生命力を摂取すれば病気を治癒することができると原始時代から人々は信じていたとされる。山海の珍味はもちろんのこと、丸焼きの雉がまだ生きているかのように飛んでいるのは、相当な生命力を持っていることを表している。この意味において、金花の夢の中の外国人が言うように「それを食べるとお前の病気が、今夜の内によくなる」のも一理ある。金花と混血児の将来は夢の展開に反映され、その中で肉料理を食べた金花は快復できたが、何も食べなかった混血児は梅毒をうつされて発狂した。つまり金花は野性と強大な生命力を持っているこそ健康になれたが、混血児は動物の肉から生命力をもらっていないため発狂に至ったのだ。

もう一つの原因は、金花の主体性にある。前述したように、金花は語りの主導権を持

ち、相手の印象を操作することができる主体である。彼女は病気にかかり何度も客を拒絶する意思を持つにもかかわらず、混血児に恋愛感情を抱く。「恋愛」という言葉は、明治時代に創られた翻訳語[2]で、それが独立した個人の間に生じる好意や尊敬、愛情を意味する言葉である。すなわち、地の文の「恋愛の歓喜」という言葉は、金花の主体性と自立性を強調していると考えられる。

また、金花の主体性は彼女の土着性と抵抗にも現れている。天国の夢の中で、食べる物や使う物は全部中国風であり、「絳紗の帷を垂れた窓」から水の音を聞いた金花は「秦淮らしい心もちがした」。秦淮河は南京の古い文明を育んだ、「中国第一歴史文化名河」である。深い歴史を持つ伝統文化の環境で育てられてきた金花の天国の夢に秦淮河の音が聞こえるのは、風景道徳化の視点から解釈すると、それはいくら西洋宗教を信奉しても決して消すことのできない金花の内面に存在し続けている土着性を表している。さらに言えば、テクスト中の秦淮河という記号から、教育を受けたこともなく、西洋人や日本人の相手をする娼婦というまさに未開状態の〈遅れた〉少女の土着性が看取できる。

一方、天国の夢について、曲莉[3]は金花の身体のパフォーマンスに焦点を置き、外国人の男は金花の後方から登場して来て、対して金花は、終始彼に背を向けるような姿勢をとっていることを指摘している。金花の混血児に対して背を向けているポジショニングを夢の最後まで崩していなかったことは、まさに金花の拒否と抵抗を表している。すなわち、混血児を受け入れたことも夢の中で彼に拒否を見せたことも、金花の強固な抵抗を示している。このような強大な生命力と強固な抵抗があるがゆえに、「南京の基督」の物語言説でも物語内容でも、男女秩序の反転ができ、ジェンダーによって権力が逆転可能になるような配置が潜んでいるのである。

３、ジェンダー秩序の転覆から、新たな「近代化」の可能性を見出す

金花は主体性を持つ人物として描かれているが、日米混血の外国人は主体性のない存在のシンボルとして描き出されている。近代西洋との接触について、中国ではそれを押し留めようとする反動的な「抵抗」があったが、日本ではそれがなく、西洋の模倣とその摂取に長けていたことからスムーズに「近代化」を遂げた。それは、「抵抗」すべき「自己」が日本になかったのだと竹内好は主張する。混血児の「黒い髪」から日本がアメリカに対する追随性についての中村三春[4]の指摘と、「自己植民地化」という小森陽一の唱える概念を踏まえると、日米混血の外国人は「抵抗しない」日本の象徴だと考えられる。言い換えれば、日米混血児の人物像は、日本がアメリカを模倣し、西洋列強の侵

---

[2]柳父章『翻訳語成立事情』（岩波書店、一九八二年）、八九－一〇五頁。

[3]曲莉「芥川龍之介『南京の基督』論：金花の＜奇蹟＞物語の深層心理」（『アジア遊学（207）東アジアの女性と仏教と文学』、二〇一七年）、三〇六頁。

[4]中村三春「混血する表象――小説「南京の基督」と映画『南京的基督』」（『日本文学』、二〇〇二年）、一七頁。

入に備えるために自発的に自己植民地化を遂げたという記号的な意味を持っている。そうすると、金花が全快したのは、彼女の体内に外来的なものに抵抗する〈抗体〉（生命力と「抵抗」する「自己」）があるためである。逆に、〈抗体〉のない混血児が快復できずに発狂し、「近代化」と共に身につけていた知識をも使えなくなったのは、まさに「近代」に対する「土着」の圧倒的な勝利である。そして、その「抵抗」する「自己」こそが後進国としての独自な「近代化」のあり方を模索し、そこに新たな可能性を見出せる根本的な原因である。

ここで、神道・仏教・儒教・民間宗教などが共存し混交している日本を描いた「神神の微笑」（一九二二）を参考軸にしたい。外国の文化や思想が日本で定着する時は、それらが「造り変えられた」時だけだという表現は、まさに小林秀雄[5]が指摘した通り、日本は様々なものを受け入れているが、それらの外来のものを超越的な他者としてではなく、「意匠」として自らの中に組み込んでいるということを示している。日本の旅行家は語り手によって「若い」と提示され、彼の未熟さが終始強調されている。和田博文[6]は、「漢文学や漢詩の素養を身につけた人々にとって、中国文化は自己形成の途上で出会った導き手である」と指し、「中国の土を踏むことは、日中文化交流の歴史の中で成立する、自らの精神のアイデンティティの確認を意味していた」と指摘している。すなわち、中華文明の中で歴史的に自己を形成してきた人にとって、中国は他者でありながら、同時に自己の一部分にもなる。「若い」日本の旅行家は、中国旅行を通じて、金花や混血児の経験を参考にしながら「自己」を構築していくのである。

４、おわりに

本発表では、まず語りのレベルと物語内容から、ジェンダー秩序の転覆を整理し、金花は生命力に満ちた主体的な存在であることを確認する。そしてポストコロニアニズムの視点から登場人物を分析し、金花に象徴されている近代中国は、竹内好の提唱した「抵抗」する「自己」があるため「快復」できたに対して、混血児に象徴されているひたすらにアメリカを模倣した日本はそのような〈抗体〉がないため「発狂」する憂き目に遭った。その上で「神神の微笑」と対照し、中国のように強固な「自己」を持つことの重要性を再認識し、日本の旅行家は「自己」を構築していくプロセスにあることを確認する。このように、「南京の基督」において女性と男性との力関係を逆転してしまう構図から、男性中心主義と植民地主義への反抗が読み取れる。そしてこの反抗の基本となる〈抗体〉はアジアの新たな「近代化」へのアプローチを生み出せる。

---

[5]「様々なる意匠」『小林秀雄全集』第一巻（新潮社、二〇〇二年）、一三三ー一五一頁。

[6]和田博文・黄翠娥『＜異郷＞としての大連・上海・台北』（勉誠出版、二〇一五年）、一六二頁。